

Endoscopic ultrasound-guided antegrade procedures for managing bile duct stones in patients with surgically altered anatomy: Comparison with double-balloon enteroscopy-assisted endoscopic retrograde cholangiography (with video)

メタデータ	言語: English 出版者: 公開日: 2022-06-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高崎, 祐介 メールアドレス: 所属:
URL	https://jair.repo.nii.ac.jp/records/2002761

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 2474 号

Endoscopic ultrasound-guided antegrade procedures for managing bile duct stones in patients with surgically altered anatomy: Comparison with double-balloon enteroscopy-assisted endoscopic retrograde cholangiography (with video)

術後再建腸管患者における胆管結石に対する EUS 下順行性治療とダブルバルーン内視鏡下 ERC の比較検討

高崎 祐介 (たかさき ゆうすけ)

博士 (医学)

論文内容の要旨

本論文は術後再建腸管の胆管結石に対するダブルバルーン内視鏡下 ERCP (DB-ERC) と超音波内視鏡下順行性治療 (EUS-AG) を過去のカルテを元に比較検討したものである。術後再建腸管は手術により胃から十二指腸という通常構造から変更されているため乳頭部や吻合部までの距離が長くなり、通常の方法の胆石治療 (ERCP) では行えない。かつては手術や経皮経肝胆道ドレナージといった方法が行われていたが、侵襲が大きいことや体外にチューブが出てしまうことから生活の質を落としていた。そこで小腸用の内視鏡であるダブルバルーン内視鏡を用いて ERCP を行う方法が開発され、内視鏡で治療が行えるようになり、標準治療として行われるようになった。しかし、一方で長距離内視鏡を挿入する必要があり、乳頭部や吻合部まで到達できなかつたり、小腸用内視鏡であるため胆管へ処置具を入れることを想定されていないため、胆管に処置具ができず胆石が除去できないこともあった。近年超音波内視鏡による治療が開発され、少しずつその成績が報告されてきた。しかし、どちらの治療がいいのかの比較はされておらず、今回 2 つの治療を比較することとなった。23 人の EUS-AG 症例と、31 人の DB-ERC 症例を比較した。全 54 名のうち、29 名が Rouex-en Y 再建でだった。技術的成功率は EUS-AG 群で 87.0%、DB-ERC 群で 64.5%だったが統計学的有意差はなかった ($P=0.11$)。しかし、処置時間は EUS-AG 群 51.9 分、DB-ERC 群で 72.6 分と有意に短い結果であった ($P=0.01$)。また高難易度と言われている Rouex-en Y 再建では技術的成功率において EUS-AG 群 92.3%、DB-ERC 群 56.3%と有意に高い結果 ($P=0.04$) で、処置時間も 48.6 分と 85.9 分で有意に短い結果であった ($P=0.0008$)。これらの結果から術後再建腸管に対する胆管結石治療において EUS-AG は標準治療である DB-ERC と比べ同等以上の結果を残し、処置時間は短い結果であった。特に Rouex-en Y 再建では EUS-AG は DB-ERC より適している可能性を示唆した。